

LOS CAPRICHOS

芥川龍之介

青空文庫

わらひ
笑は量的に分てば微笑^{びせう}哄笑^{こうせう}の二種あり。質的に分てば嬉笑^{きせう}嘲笑^{てうせう}苦笑^{くせう}の三種あり。
……予が最も愛する笑は嬉笑嘲笑と兼ねたる、爆声の如き哄笑なり。アウエルバッ
ハの穴蔵^{ぐまい}に愚昧^{ぐまい}の学生を奔^{はし}らせたる、メフィストフエレエスの哄笑なり。

——カアル・エミリウス——

ユダ

逾越^{すぎこし}と云へる「種^{たね}入れぬ麵包^{パン}の祭^{まつり}」近づけり。祭司^{さいし}の長学者^{をさ}たち、如何^{いか}にしてかイエ
スを殺さんと窺^{うかが}ふ。但民^{ただ}を畏^{おそ}れたり。諸^{さて}悪魔十二の中のイスカリオテと称^{とな}ふるユダに憑^つき
ぬ。ユダ橄欖^{かんらん}の林を歩める時、悪魔彼に云ひけるは、「イエスを祭司^{をさ}の長^{をさ}たちに売^{わた}せ。
然^さすれば三十枚の銀子^{ぎんす}を得べし。」されどユダ耳を蔽ひ、林の外に走り去れり。後又イエ
ルサレムの町をさまよへる時、悪魔彼に云ひけるは、「イエスを祭司^{をさ}の長^{をさ}たちに売^{わた}せ。然^さ
らずば爾^{なんぢ}もイエスと共に、必^{かならず}十字架に釘^つけらるべし。」されどユダ耳を蔽ひ、イエスのも

とに走り去れり。イエス彼に云ひけるは、「ユダよ。我誠に爾を知る。爾は荒野の獅子よりも強し。但小羊の心を忘る勿れ。」ユダ、イエスの言葉を悦べり。されどその意味を覺らざりき。逾越の祭来りし時、イエス弟子と共に食に就けり。悪魔三度ユダに云ひけるは、「イエスを祭司の長たちに売せ。然すれば爾の名、イエスの名と共に伝はらん。イエスの名太陽よりも光あれば、爾の名黒暗よりも恐怖あらん。爾は天国の奴隸たらざるも、必地獄の王たるべし。バビロンの淫婦は爾の妃、七頭の毒竜は爾の馬、火と煙と硫黄とは汝が黒檀の宝座の前に、不断の香煙を上らしめん。」ユダこの声を聞きし時、目のあたりに地獄の莊嚴を見たり。イエス忽ちユダに一撮の食物を与へ、静かに彼に云ひけるは、「爾が為さんとする事は速かに為せ。」ユダ一撮の食物を受け、直ちに出でたり。時既に夜なりき。ユダ祭司の長カヤパの前に至り、イエスを彼に売さんと云へり。カヤパ駭きて云ひけるは、「爾は何物なるか、イエスの弟子か、はたイエスの師か。」それはユダの姿、額は嵐の空よりも黒み、眼は焰よりも輝きつつ、王者の如く振舞ひしが故なり。……

——中華第一の名庖丁 張肅臣の談——

眼をね、今日は眼を御馳走しようと思つたのです。何の眼？ 無論人間の眼をですよ。

そりや眼を召上めしあがらなければ、人間を召上つたとは云はれませんか。眼と云ふやつはうま

いものですね。脂があつて、齒ぎれがよくつて、——え、何にする？ まあ、湯タンへ入れる

んです。丁度鳩の卵のやうに、白眼と黒眼とはつきりしたやつが、香シヤンツアイ菜が何かぶ

ちこんだ中に、ふはふは浮いてゐやうと云ふんです。どうです？ 悪くはありません。

私わたしなんぞは話してゐても、自然と唾つば氣がたまつて来ますぜ。そりや清湯燕窩せいとうえんくわだとか清

湯れいたん鵲蛋だとかとは、比べものにも何にもなりませんや。所が今日けふその眼を抜いて見ると、

——これにや私も驚きましたね。まるで使ひものにやならないんです。何、男か女か？

男ですよ。男も男も、髭ひげの生えた、フロツク・コオトを着てゐる男ですがね。御覽なさい。

此處ここに名刺があります。Her Suffendpuff. ちつとは有名な男ですか？ 成程なるほどね、つまり

その新聞や何かに議論を書いてゐる人間なんでせう。そいつの眼玉がこれぢやありません

か？ そら、壁へ叩きつけても、容易な事ぢや破れませんや。驚いたでせう。二つともこ

の通り入れ眼ですよ。硝子細工ガラスざいくの入れ眼ですよ。

疲労

雨を孕^{はら}んだ風の中に、竜騎兵の士官を乗せた、アラビア種^{だね}の白馬^{しろうま}が一頭、喘^{あへ}ぎ喘^{あへ}ぎ走つて行つた。と思ふと銃声^{なみき}が五六発、続けさまに街道^{かいだう}の寂寞^{せきばく}を破つた。その時^{ボブラア}白楊^{ポプラ}の並木^{なみき}の根^ねがたに、尿^{ねう}をしやんだ一頭の犬は、これも其処^{そこ}へ来^きかかつた、仲間の彪犬^{むくいぬ}に話しかけた。

「どうだい、あの白馬の疲れやうは？」

「莫迦^{ばか}々々しいなあ。馬ばかりが獣^{けもの}ぢやあるまいし、——」

「さうとも、僕等に乗つてくれれば、地球の極^{はて}へも飛んで行くのだが、——」

二匹の犬はかう云ふが早い、竜騎兵の士官でも乗せてゐるやうに、昂然^{かうぜん}と街道を走つて行つた。

魔女

魔女は箒はうきに跨りながら、片々へんぺんと空を飛んで行つた。

それを見たものが三人あつた。

ひとり

一人は年をとつた月だつた。これは又かと云ふやうに、黙々と塔の上にかかつてゐた。

もう一人は風見かぜみの鶏だつた。これはびつくりしたやうに、ぎいぎいさを桿さの上に啼きまはつ

た。

最後の一人は大学教授 Dundergutz 先生だつた。これはその後熱心ごに、魔女が空を飛んで行つたのは、箒が魔女を飛ばせたのか、魔女が箒を飛ばせたものか、どちらかと云ふ事を研究し出した。

何でも先生は今日こんにちでも、やはり同じ大問題を研究し続けてゐるさうである。

魔女は箒に跨りながら、昨夜ゆうべも大きな蝙蝠かうもりのやうに、片々と空を飛んで行つた。

遊び

崖に臨んだ岩すきの隙には、一株の羊齒しだが茂つてゐる。トムはその羊齒の葉の上に、さつきから一匹の大土蜘蛛おほつちぐもと、必死の格闘を続けてゐる。何しろ評判の渾名あだな通り、親指位くらゐしかな

い男だから、蜘蛛と戦ふのも容易ではない。蜘蛛は足を抃げた儘、まつしぐらにトムへ殺到する。トムはその度に身をかはせては、咄嗟に蜘蛛の腹へ一撃を加へる。……

それが十分程続いた後、彼等は息も絶え絶えに、どちらも其処へゐすくまつてしまった。羊齒の生えた岩の下には、深い谷底が開いてゐる。一匹の毒竜はその谷底に、白馬へ跨つた聖チヨオチと、もう半日も戦つてゐる。何しろ相手の騎士の上には、天主の冥護が加つてゐるから、毒竜も容易に勝つ事は出来ない。毒竜は火を吐きかけ、吐きかけ、何度も馬の鞍へ跳り上る。が、何時でも竜の爪は、騎士の鎧に迄つてしまった。聖チヨオチは槍を揮ひながら、縦横に馬を跳らせてゐる。軽快な蹄の音、花々しい槍の閃き、それから毒竜の炎の中に、々と靡いた兜の乱れ毛、……

トムは遠い崖の下に、勇ましい聖チヨオチの姿を見ると、苦々しさうに舌打ちをした。「畜生。あいつは遊んでゐやがる。」

Don Juan aux enfers

ドン・ジュアンは舟の中に、薄暗い河を眺めてゐる。時々古い舟べりを打つては、蒼白

い火花を迸らせる、泊夫藍色の浪の高さ。その舟の艫には艫のやうに、黙々と今日も櫂を取った、おお、お前！ 寂しいシヤアロン！

或靈は遠い浪の間に、高々と両手をさし上げながら、舟中の客を呪つてゐる。又或靈は口惜しやうに、舟べりを煙らせた水沫の中から、ぢつと彼の顔を見上げてゐる。見よ！ あちらの舳に縫つた、或靈の腕の逞ましさを！ と思ふところの艫にも、シヤアロンの櫂に払はれたのか、真逆様に沈みかかった、或靈の二つの足のうら！

妻を盗まれた夫の靈、娘を掠められた父親の靈、恋人を奪はれた若者の靈。——この河に浮き沈む無数の靈は、一人も残らず男だった。おお、わが詩人ボオドレエル！ 君はこの地獄の河に、どの位夥しい男の靈が、泣き叫んでゐたかを知らなかった！

しかしドン・ジュアンは冷然と、舟中に劍をついた儘、勻の好い葉巻へ火をつけた。さうして眉一つ動かさずに、大勢の靈を眺めやつた。何故彼はこの時でも、流俗のやうに恐れなかつたか？ それは一人も靈の中に彼程の美男がゐなかつたからである！

幽霊

或^{ふるほんや}古本屋の店頭。夜^{よる}。古本屋の主人は居睡りをしてゐる。かすかにピアノの音がするのは、近所にカフエエのある証拠らしい。

第一の幽霊 （さもがっかりしたやうに、朦朧^{もうろう}と店さきへ姿を現す。）此処^{ここ}にも古本屋が一軒ある。存^{ぞんぐわい}外^{がい}かう云ふ所には、品物が揃つてゐるかも知れない。（熱心に棚の書物を検べる。）近^{ちかまつ}松全集、万葉集略解^{まんえふしふりやくげ}、たけくらべ、アンナ・カレニナ、芭蕉句^{ばせう}集、——ない。ない。やつぱりない。ないと云ふ筈はないのだが……

第二の幽霊 （これもやはり大儀^{たいぎ}さうに、ふはりと店へはひつて来る。）おや、今晚は。第一の幽霊 今晚は。どうだね、その後^ご君の戯曲は？

第二の幽霊 駄目^{だめ}、駄目。何処^{どこ}の芝居でも御倉^{おくら}にしてゐる。やつてゐるのは不相^{あひかはらず}変、^{かび}黴の生えた旧劇ばかりさ。君の小説はどうなつたい？

第一の幽霊 これも御同様絶版と来てゐる。もう僕の小説なぞは、誰も読むものがなくなつたのだね。

第二の幽霊 （冷笑するやうに。）君の時代も過ぎ去つたかね。

第一の幽霊（感傷的に。）我々の時代が過ぎ去つたのだよ。尤も僕等が往生した
のは、もう五十年も前だからなあ。

第三の幽霊（これは燐火を飛ばせながら、愉快さうに漂つて来る。）今晚は。何だ
かいやにふさいでゐるぢやないか？ 幽霊が悄然としてゐるなんぞは、当節がらあんな
りはやらないぜ。僕は批評家たる職分上、諸君の悪趣味に反対だね。

第一の幽霊 僕等がふさいでゐるのぢやない。君が幽霊にしては陽氣過ぎるのだよ。

第三の幽霊 そりや大きにさうかも知れない。しかし僕は今夜という今夜、始めて死に
甲斐を感じたね。

第二の幽霊（冷笑すやうに。）君の全集でも出来るのかい？

第三の幽霊 いや、全集は出来ないがね。兎に角後代に僕の名前が、伝はる事だけは
確になつたよ。

第二の幽霊（疑はしさうに。）へええ。

第一の幽霊（喜しさうに。）本当かい？

第三の幽霊 本当とも。まあ、これを見てくれ給へ。（書物を一冊出して見せる。）こ
れは今日出来た本だがね。この本の中に僕の事が、ちゃんと五六行書いてあるのだ。どう

だい？ これぢやいくら幽霊でも、はしやぎまはらずにはゐられないぢやないか？

第二の幽霊　ちよいと借してくれ給へ。（一生懸命に頁ページをはぐる。）僕の名前は出てゐないかしら？

第一の幽霊　名前は出てるだらう。僕のも次手ついでに見てくれ給へ。

第三の幽霊　（得意さうに独り言ことごとを云ふ。）おれもとうとう不朽ふきうになつたのだ。サント

・ブウヴやテエヌのやうに。——不朽と云ふ事も悪いものぢやないな。

第二の幽霊　（第一の幽霊に。）どうも君の名は見えないやうだよ。

第一の幽霊　君の名も見えないやうだね。

第二の幽霊　（第三の幽霊に。）君の事は何処どこに書いてあるのだ？

第三の幽霊　索引さくいんを見給へ。索引を。××××と云ふ所を引けば好いいいのだ。

第二の幽霊　成程なるほど、此処ここに書いてある。「当時数かずの多かつた批評家中、永久に記憶さ

るべきものは、××××と云ふ論客である。……」

第三の幽霊　まあ、ざつとそんな調子さ。其処そこまで読めば沢山たくさんだよ。

第二の幽霊　次手ついでにもう少し読ませ給へ。「勿論彼は如何いかなる点でも、毛頭まうとう才能ある

批評家ではない。……」

第一の幽霊（満足さうに。）それから？

第二の幽霊（読み続ける。）「しかし彼は不朽になるべき、十分な理由を持つてゐる。

……」

第三の幽霊 もうそれだけにして置き給へ。僕はちよいと行く所があるから。

第二の幽霊 まあ、しまひまで読ませ給へ。（愈大声に。）「何となれば彼は——」

第三の幽霊 ぢや僕は失敬する。

第一の幽霊 そんなに急がなくても好いぢやないか？

第二の幽霊 もうたつた一行だよ。「何となれば彼は終始一貫——」

第三の幽霊（やけ気味に。）ぢや勝手に読み給へ。左様なら。（燐火と共に消える。）

第一の幽霊 何だつてあんなに慌てたのだらう？

第二の幽霊 慌てる筈さ。まあ、これを聞き給へ。「何となれば彼は終始一貫、芥川

竜之介の小説が出ると、勇ましい悪口を云ひ続けた。……」

第一の幽霊（笑ふ。）そんな事だらうと思つたよ。

第二の幽霊 不朽もかうなつちや禍だね。（書物を抛り出す。）

その音に主人が眼をさます。

主人 おや、棚の本が落ちたかしら。こりやまだ新しい本だが。

第二の幽霊 (わざと物凄い声をする。) それもぢきに古くなるぞ。

主人 (驚いたやうに。) 誰だい、お前さんは？

第一の幽霊 (第二の幽霊に。) 罪な事をするものぢやない。さあ、一しよに Hades へ
歸らう。(消える。)

第二の幽霊 ちつとは僕の本も店へ置けよ。(消える。)

主人は呆氣あつけにとられてゐる。

(大正十年十一月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介作品集第三卷」昭和出版社

1965（昭和40）年12月20日発行

入力：j.utyama

校正：かとうかおり

1999年1月26日公開

2004年3月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

LOS CAPRICHOS

芥川龍之介

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>